

平成 21 年 5 月 22 日現在

研究種目： 基盤研究（C）  
 研究期間： 2007～2008  
 課題番号： 19520416  
 研究課題名（和文） 英語の転移現象に関する統語構文論的・機能構文論的研究  
 研究課題名（英文） Syntactic and functional studies of dislocational phenomena in English  
 研究代表者 秋 孝道（TAKAMICHI AKI）  
 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授  
 研究者番号： 60192895

## 研究成果の概要：

現代理論言語学では、文中要素が、文頭位置に移動して現れるのは、文頭位置の特異的な意味・機能を担うためであると考えられている。本研究では、さらに、文中要素が、文頭・文末位置に移動して現れるのは、文頭・文末位置の特異的な意味・機能を担うためであるとする仮説を立て、英語の言語現象に考察を加えた。その結果、存在文の場所表現、経験者／受益者を表す for 句、疑似分裂文などが、上記の仮説を裏付けることを明らかにした。また、これら知見を英語教育に還元する可能性についても検討した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野： 英語統語論・意味論

科研費の分科・細目： 言語学・英語学

キーワード： 転移現象、文頭、文末、移動、駆動要因、統語構文論、機能文法論、

## 1. 研究開始当初の背景

英語の文法現象（特に、名詞句からの外置、重名詞句転移、焦点転移、右方転移、話題化、焦点話題化、左方転移、場所句倒置に代表される文法現象（便宜的に、転移現象と呼ぶ）を論ずる際、統語構文論に基づく分析と、機能構文論に基づく分析を想定することが可能である。この場合、統語構文論分析と機能

構文論分析の研究対象が相補的になり、双方の分析がいわば「棲み分け」をする状況は論理的にあり得ることである。しかしながら、このような状況は希であり、英語の同一文法現象に対し、統語構文論分析と機能構文論分析の両方が提示されることが一般的である。これら分析を概観すると、残念なことに、同一の文法現象を「統語」「機能」という別個の視点から論ずることに終始し、対抗する研

究を批判こそすれ、示唆的な知見・主張を提供しようとする建設的姿勢を示さない事例が少なくないと言わざるを得ない。

しかしながら、双方の研究がそれぞれに成熟度を高めて行く中で、多くの事例ではないものの、自らの分析の妥当性を立証しようとしながら、対抗する文法論の視点に留意して、刺激的知見を提示しようとする建設的な研究がなされるようになってきている。このような建設的な研究が連鎖的に行われれば、当然の帰結として、当該文法現象に対する理解が格段に深化することになる。その適例としては、英語の「名詞句からの外置」の現象に関する、Kyle Johnson 氏の学位論文での非対格仮説に基づく提案、これに対する高見健一氏・久野暉氏の機能構文論からの反論、その反論を受けて提出された中島平三氏の新たな提案、という一連の研究を挙げることが出来る。

このような研究方法論を前提にして、本研究の代表者（秋 孝道）と分担者（内田 恵）は、平成17・18年度に交付された科学研究費補助金による研究（基盤研究（C）一般「英語の文末付加要素に関する実証的・理論的研究」課題番号17520321、代表者：秋 孝道、協力者：内田 恵）において、英語のいわゆる「右方移動現象」に関して、統語構文論と機能構文論の双方に基づいた研究を共同で進めてきているところである。その中で、英語のある種の右方移動現象に関する事実は、Michael Rochemont 氏や Richard Larson 氏が主張する「基底部生成分析」で説明することは不可能であり、統語構文論で規定される統語的移動操作を仮定することによって初めて原理的な説明を与えることが出来ること、その統語的移動操作の駆動要因は、機能構文論で定義される意味概念であると考えべき証拠が存在すること、などの研究成果を導くに至った。

そこで、この研究を発展させて、右方移動現象一般、さらには、話題化・左方転移・場所句倒置などに見られる「左方移動現象」に関しても、上記「移動分析」が必然的であると考えられる根拠があるのかを検証することが必要である、また、この研究により、移動分析が可能な転移現象を特定し、この転移現象に特徴的に観察される機能構文論的概念を抽出し、「移動駆動要因としての機能構文論的概念」を定義することによって、機能構文論的概念の精緻化を進めることが出来る、という認識に達し、本研究を応募するに至った。

## 2. 研究の目的

本研究で研究対象とする英語の転移現象は、名詞句からの外置、重名詞句転移、焦点

転移、右方転移、話題化、焦点話題化、左方転移、場所句倒置などである。これらに関しては、「移動分析」と「基底部生成分析」が提出されており、本研究では、統語構文論で規定される統語的移動操作による分析が有効であるかどうか、さらに、その移動操作駆動要因は何であると考えられるか、などを検討する。また、これらの構文に特徴的に観察される「話題」「焦点」「新情報」などの機能構文論的概念に着目して、これらを駆動要因と考えるべき根拠を追求する。

機能構文論における「話題」「焦点」「新情報」などの概念は、相互に関連する概念であり、完全に独立した存在であるわけではない。したがって、同一構文であっても、異なった概念を採用する複数の機能構文論的分析が提示される場合もある。その際、どの概念を採用すべきか、代わるべき概念はどのような概念であるのか、といった問題が生ずる。この問題は、本研究においては、機能構文論の観点ばかりでなく、統語構文論の観点からも、新たな視点を加えながら対処して行くことが可能である。すなわち、統語的移動操作の駆動要因として、どのような機能構文論的概念が許されるのかという問題を解決することが出来れば、当該構文に特徴的に観察される機能構文論的概念のありうるべき姿を明らかにすることが可能となる。そうすることによって、機能構文論的概念の理論を構築することが可能になるかもしれない。本研究においては、これらの可能性も追求して行く。

## 3. 研究の方法

本研究の初年度の研究は、まず、英語の転移現象に関する先行研究の資料収集を進め、統語構文論と機能構文論の立場から、どのような事実観察と考察・分析がなされてきたのかを、詳細にわたって明らかにして、個々の分析の妥当性を再検討する。統語構文論に基づく研究に関しては、「移動分析・基底部生成分析」それぞれの主張を裏付けるとされる根拠を再評価して、これらの分析の妥当性の確認を行う。また、新たな言語事実の発掘を念頭に置き言語資料の調査を積極的に進め、英語の転移現象の性質を実証的に解き明かすことにも努力を傾けたいと考えている。機能構文論に基づく研究については、どのような機能論的概念が提案されてきたのかを確認することから出発する。そして話題・焦点・新情報などの概念が、英語の転移現象以外の言語現象を記述・説明する上で、どのように利用されてきたのかという問題についても調査を進め、機能構文論的概念のいわば「俯瞰図的基盤」を構築したい。

最終年度の研究に関しては、英語の転移現

象一般に対して、統語構文論で規定される統語的移動操作を仮定することが可能であるのか、また可能であれば、その統語的移動操作の駆動要因を機能構文論で定義される意味概念とすることが出来るのか、この二つの重要な問題に取り組むことにする。統語的移動操作を仮定する立場にとってまず問題となるのは、基底部生成分析の側によって示された移動操作を否定する根拠である。この根拠を覆す可能性を求めて、新たに明らかにされた新知見を手がかりにして、過去に提出された証拠を再検討する作業を進める。機能構文論の立場からは、英語の転移現象に特徴的に観察される機能構文論的概念を精査することから始めたい。同一構文に対して異なった機能構文論的概念による分析が提案されている場合には、それぞれの分析を裏付けるとされる根拠の再評価を行い、仮定される統語的移動操作の駆動要因として望ましい機能構文論的概念を特定する作業を進める。

しかしながら、英語の全転移現象に対して統語的移動操作を仮定することは不可能であると結論せざるを得ない事態も想定しておく必要がある。そのような事態には、研究計画を部分的に変更することによって対応することにする。研究計画の部分的な変更が必要となる可能性が最も高いのは、移動操作を仮定することがどうしても許されない英語の転移現象が存在する場合である。便宜上、このような転移現象を「非移動転移現象」と、また、移動操作を仮定することが可能な（あるいは、仮定すべき）転移現象を「移動転移現象」と、呼ぶことにする。

計画変更後の本研究では、まず、移動転移現象と非移動転移現象を詳細に比較検討して、その本質的な相違はどこに求められるかを考察してゆく。この本質的な相違が双方の転移現象の機能構文論的相違に対応している可能性は、十分に考えられることである。そこで、この着想の妥当性を検証すべく、移動転移現象と非移動転移現象に観察される機能構文論的概念を比較精査する作業を行うことにする。移動転移現象だけに観察される機能構文論的概念を発見することが出来れば、統語的移動操作の駆動要因となりうる機能構文論的概念を特定することが出来ることになる。

#### 4. 研究成果

(1) 英語の存在文に現れる場所表現に関してはWilliams(1984)の付加部分析が提案されているが、この分析を支える言語事実は、Kuno(1975)の言う場面設定表現として分析されるべきであって、Williams(1984)の付加部分析は誤りであることを明らかにした。そ

して、当該場所表現が文頭・文末に現れることに着目し、これらが場所設定の機能を駆動要因として左方・右方に移動される可能性を検討した。この研究は、存在文の小節分析に対するWilliamsの反論に反駁することになると同時に、当該場所表現を項と見なすべきであることを明らかにしている。さらに、場面設定の機能を担う上位句の必要性を示唆している。

(2) Tough 構文においては、主節主語が不定詞補文内から移動によって派生されるという提案がなされている。この提案の妥当性を検証すべく、仮定される基底構造を反映する構文とTough 構文を構造的に比較した。その結果、両構文は構造的に異なっており、当該分析の妥当性が否定された。この結果が意味することは、Tough 構文の主節主語が持つ特異の意味は、移動の駆動要因には成り得ないということである。また、この研究結果は、Nunes(2004)のsideward movementによる分析と整合するもので、この観点からのTough 構文の分析の妥当性を示唆している。

(3) 疑似分裂文の派生方法に関しては、Williams(1983)が倒置分析を提案している。疑似分裂文に関しては二種類の方言差があることを明らかにし、上記倒置分析を発展的に修正するかたちで、二種類の倒置規則が方言差に反映されていると主張した。二種類の倒置規則には、全く別の駆動要因が関与していると考えられ、この点にさらに考察を加えることによって、疑似分裂文の意味機能を解明したいと考えている。

(4) 転移構文の有標性を関連性理論の観点から考察し、英語教育分野への応用の可能性を検討した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①Takamichi Aki, A Preliminary Study on the *Wh*-Cleft Construction in English, 新潟大学言語文化研究、第14号、掲載決定、2009、査読有

②Takamichi Aki, Remarks on the Non-TM and TM Constructions in English, 平成20年度新潟大学プロジェクト推進経費(助成研究B)・平成20年度人文社会・教育科学系研究プロジェクト経費(学系基幹研究)「諸言語の格関係交替現象に関する統語構文論的・機能構文論的研究」研究成果報告書、7~15、2009、査読無

③Takamichi Aki、Notes on the *Wh*-Cleft Construction in English、平成 20 年度新潟大学プロジェクト推進経費(助成研究 B)・平成 20 年度人文社会・教育科学系研究プロジェクト経費(学系基幹研究)「諸言語の格関係交替現象に関する統語構文論的・機能構文論的研究」研究成果報告書、17～27、2009、査読無

④内田 恵、教育のための英文法、静岡大学教育学部研究報告教科教育学編、第 40 号、85～96、2009、査読無

⑤Takamichi Aki、A Note on the Locational *There*-Sentence in English、The State of the Arts in Linguistic Research、205～213、2008、査読有

⑥内田 恵、関連性理論と有標構文、言語研究の現在、450～459、2008、査読有

[その他]

#### 講演

①内田 恵、コミュニケーション活動と英文法、第 54 回教育研究発表会ワークショップ『主体性を高める授業過程』英語科講演、静岡大学教育学部附属島田中学校、2008 年 11 月 6 日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

秋 孝道 (TAKAMICHI AKI)  
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授  
研究者番号： 60192895

### (2) 研究分担者

内田 恵 (MEGUMI UCHIDA)  
静岡大学・教育学部・教授  
研究者番号： 80185032  
(2007年度のみ)

### (3) 連携研究者

内田 恵 (MEGUMI UCHIDA)  
静岡大学・教育学部・教授  
研究者番号： 80185032  
(2008年度のみ)